

—KOSMOS特別企画—	
情報処理と大学図書館……………	2
図書館貸出冊数一覧……………	4
研修報告……………	5
雑学事始……………	6
アメリカ各種図書館見学記……………	7
館内だより……………	8
編集後記……………	8

1981 秋 (No. 55・56 合併号)

## 特集にあたって

### —情報処理システムと大学図書館—

最近、大学図書館界において「学術情報処理システム」に関して、総合的な整備が施されようとしている。

そのような社会的背景の主要な起因に、学術情報の世界的氾濫、激増とともに、学術研究の急速な進歩と多様化が挙げられている。

ちなみに、その具体例を示せば、我国の一次情報（図書、学術雑誌等）の蓄積は、大学図書館、国立国会図書館、公共図書館の総計で約1億7000万冊に達し、その内1億冊が大学図書館で所蔵しているといわれている。また、外国で流通している学術情報量も年々増加の傾向をたどっているのが現状である。

このように、漸増する学術情報資源を、より迅速、かつ的確に把握し、高次元の効果的な学術研究体制を確立するため、国政レベルで、いくつかの構想、施策が打ちだされている。

その一つに、昭和55年学術審議会が文部省の諮問をうけて、「今後における学術情報システムの在り方」について答申をしたという経緯がある。

その答申の基本的な狙いは、総合的な学術情報システムの形成には、図書、学術雑誌等の目録情報データベースと、所在情報のデータ・ベースの全国的な検索利用を通して、我国における新しい学術情報流通システム体制を確立することにある。

また、今年の4月には国立国会図書館のジャパンマークが頒布されるにいたった。

今、多くの大学図書館がこのジャパンマークデータに基づく書誌情報検索や、図書館管理システムにおける選書、整理、貸出等のハウスキーピング業務にいたる開発が着々と押し進められている。

現在、当大学においても、図書館を含めて総合的な組織構成による「機械化検討委員会」が発足し、鋭意検討されている。今のところ、どのような構想で基本方針が集約されるかは定かではないが、今後の考え方の一つとして、図書館を包含した全学的なトータルシステムの方向で位置づけるのか、あるいは図書館独自のデータベースを設け、オンラインシステムによる情報処理を行なうかは、当大学の未来構想との関わりの中で慎重に決定されるべきであろう。

以上、現況における情報処理についての概要の一端を述べたが、今、大学図書館が完全な型で、コンピュータを導入するには、まだ多くの未開発の分野が存在することも事実である。このような状況下において、図書館員相互間においては、このための情報交換や研修が盛んに行なわれ、館員層には極めて関心が高い。

他面、図書館利用者間にこのような状況が余り知られていないという現状を勘案して、今回本テーマについての“特集”を企画した。

特集のためご多忙にもかかわらずご執筆いただいた各先生方に深甚なる謝辞を表する次第である。（コスモス編集委員 池田勉 記）



# — K O Σ M O Σ 特別企画 —

## 情報処理と大学図書館

### 全国書誌情報システムと 国立国会図書館

国立国会図書館連絡部

図書館協力課課長 松 沢 隆 夫

国立国会図書館（以下NDL）では本年4月から“ジャパン・マーク”（日本全国書誌機械可読目録）の頒布を開始した。NDLは昭和46年にコンピュータを導入して以来、機械処理による各種索引、目録の編纂システムを逐次開発してきた。昭和52年からは“ジャパン・マーク”の基礎となる和書システムによる目録データの入力を開始し、昭和53年から“納本週報”（現在の“日本全国書誌 週刊版”）の機械編纂を、また、昭和55年からは“日本全国書誌 週刊版”の編集用データを利用して目録カードを電算機から直接打出すように改め、これにより印刷カードサービスは利用館の多様な注文に応ずることができるようになった。さらに今回、機械可読型の全国書誌情報のデータベース“ジャパン・マーク”が出現したことは、まだ解決しなければならない種々の問題を抱えてはいるにしても、全国書誌情報の地域的あるいは全国的ネットワークシステム構想の実現に向けて大きく歩を進めるモメントになったといえよう。この全国書誌情報ネットワークの構想を念頭に置き、国立の中央図書館としてのNDLの役割にふれて見る。まず国内出版物の書誌情報については、納本制度が始まって30有余年を経た現在、いまだに納本漏れや遅延の問題を抱えている。わが国唯一の納本図書館であるNDLとしては国内資料の収集のため、組織を挙げて努力しなければならないのが、実際にはNDL単独では到底不可能であり、地方の県立図書館、大学図書館などとの連携協力によってしか期待できない状況にある。このことから国内で刊行される出版物の網羅

的な収集とその書誌データの作成、利用のため協力体制作りが必要である。また、外国出版物の書誌情報に対するニーズ（特に大学図書館において）は切実なものがあり、そのために国内書誌情報ネットワークを国際的書誌情報ネットワークにリンクさせていくという大きな役割がある。その外にも、オンライン時代の書誌情報流通のための技術開発と普及、書誌記述の標準化、書誌情報入力のための基準の作成、図書館職員のトレーニング等、ネットワーク作りの基礎的な土壌の醸成に本格的に取り組んでいく必要があると考える。

### 大学図書館とコンピュータ

—研究者の立場から大学図書館に望むこと—

電算センター助教授 関 根 敏 博

最近のベストセラーの一つに米国の社会学者トフラーの「第三の波」がある。この中で著者は、第一の波（農業社会）、第二の波（工業化社会）の洗礼を受けた人間社会が今まさに第三の波とも云うべき大きな社会変動期に入ろうとしていることを指摘している。彼はこの来るべき社会に明確な名前付けを行なってはいないが、少なくともその変革の重要な側面として、いわゆる「情報化社会」への転換——「物流型」の社会組織から「情報伝達型」の社会組織への転換——があることを示唆している。

もともと情報集積のメッカである図書館が、情報化社会への移行過程でいよいよその重要性を増すのはもちろんであるが、一方ではその在り方が変貌してゆくことも予想される。

図書館の業務は、「物」中心の社会では書物という「物」の集積と貸与に重点が置かれていたのに対し、「情報」中心の社会では書物に記載された「情報」の給付サービスに焦点が置かれるよう



になる。具体的に云えば、研究者は大学図書館に対して図書を借りに来るのではなく、必要な学術情報（複数の文献に散在しているかもしれない）を求めに来る。情報化社会の知的分野の多様化と学際研究への傾斜が必然的にそのような態度を研究者にとらせることになるのである。この傾向は当然図書館業務を従来の事務志向型からカウンセリング志向型へ変換させるものと考えられる。

このような推移の中で、コンピュータ（情報処理システム）は、大学図書館において二重の役割を演ずることになる。

第一には、図書の購入・整理・貸出しなどの一連の事務を機械化すること、すなわち近頃流行のOA（オフィス・オートメーション）路線に沿ってのシステム化である。これによって事務効率は飛躍的に向上し、刊行物の即時的な受け入れと公開が可能になる。

第二は、研究書の情報要求に対するカウンセリングの客観的資料として、コンピュータによる文献検索システムを長期的視野に立って作成することである。現にこの試みは文部省を中心として全国的規模においてすでに検討されつつある。

いずれにしても、大学図書館が情報化社会の時代的要請に応えるためには、できる限り早期に、人とコンピュータの協力体制を形成してゆく必要がある。

## 情報処理の“あれこれ”

東洋大学父兄会事務局長

日 種 純 一

私には今日の情報処理を語る資格はない。厳密な意味での情報を勉強したこともなく、その処理に専従した経験もないからである。ただ、過去に日立造船という重工業の第一線工場に30年間いてその半分の15年間は全社的に推進された事務管理の工場総括を担当したので、現場事務の改善にいさか実績があるにすぎない。だから、私に情報以前の資料管理を語らせても、話は20年前の陳腐なものになってしまう。

日立造船が戦後の復興を早めるために実施した施策の中に「事務管理の徹底」を大きくうたい込

んだのは、昭和26年頃だったと思う。事務のムリ・ムラ・ムダを省き、生産に直接寄与する事務体制を確立しようというのであった。当初は、工員を除く全職員に自分のやっている業務を克明に報告させ、それを分析・分類し、業務分類表を作り、この表にない仕事は禁止するなど思い切った処置が講じられた。次にはこの業務分類を基にして文書分類表を作り、ファイリングシステムを導入し図面を含むあらゆる文書をファイリングキャビネットに分類整理させ、各課単位に集中管理する方途を講じ、個有化されていた文書を共有化した。またこれも全社的に社則の整備、帳票の統制、資料室の創設、事務機械化の研究等をなし、運動開始後15年目にIBMのパンチカードシステムを日立製作所の電算機ハイタックに替え、一応の目的を達成したのであった。

その中で工場の資料管理に最も役立つのがファイリングシステムであった。すなわち、各工事の plan, do の段階にある文書を除き、see 段階（保存）以後の文書は資料室に移管させ、資料室の係員がその中から資料的価値のある文書を抽出整備して工場の内部資料として蓄積した。外部資料は本社技術研究所図書館依存で間に合わせた。

ところで、古い企業の従業員は会社の提案制度に非常によく協力する。事務・技術部門の人々が会社のためになることにヒントを得ると、大小に拘らず紙に書いて提案箱に入れる。会社はこれに対し、考案気付賞、事務賞、技術賞、論文賞などを与えるが、優秀なもので実用新案や専売特許になった場合でも、表彰は受けても、その所有権や実施権は会社に帰属せしめ、会社の知的財産として活用され、会社が永遠に栄えゆくことを祈るのである。これは実に素晴らしい貢献である。

ジャパンマークとは：「ジャパン」は言うまでもなく「日本」のことであり、マーク（MARC）は Machine Readable Catalogingの略称である。日本語では「機械可読目録」またはそのまま「マーク」と呼んでいる。つまり、書誌データをコンピュータが読みとるように記録した日本全国書誌のことである。

## 図書館電算化について

工学部分館 田 辺 陸 夫

日本で初めて大学図書館にコンピュータが導入されたのは、昭和41年のことである。そして、現在では多くの大学図書館が電算化に向けて動き出した。工学部分館においても2年程前から受入業務の電算化に着手し、さらに電算室には情報検索システムである東京大学の TOOL—IR (Tokyo University On-Line Information Retrieval) が設置された。そこで、ここでは新しい情報活動として注目を浴びている情報検索システムについて簡単に紹介することにしよう。

情報検索システムの開発は、昭和50年に東京大学が、オンラインで全国の研究機関に情報検索サービスを提供したことに始まる。その後、筑波大学、広島大学、日本科学技術情報センターなどいくつかの電算センターでこのシステムの開発が行われ、今日では多くの研究機関で利用されている。

TOOL—IR においては、すでに全国に600台近い端末機が設置されるに至った。このシステム

は、1箇所を集められた情報を電話回線を使つて引き出すもので、利用者側にはタイプライター程の小さな端末機が1台あればOKである。また、コンピュータとの会話型式で検索が行われるため操作が簡単で、かつての手作業による文献検索とは比較にならない程速く、正確に検索することができる。その上“離れた地域へのデータ転送”を可能にしたことがこのシステムの大きなメリットといえる。ただ、記憶容量が小さいこと、そして最近では、利用者が多いために回線が満杯でなかなか利用できないなどの不満もあり、この点については、今後もまだ検討の余地があると思われる。しかし、このシステムの開発が全国の図書館に大きな影響を与えたことは確かであるし、また、これらから、より広範囲にわたるコンピュータネットワークの形成が考えられており、さらに大きなウエートが置かれるに違いない。

益々増える図書館情報、そして、雑誌等の価格が高騰し続ける今日、個々の大学で十分な資料収集を行うことは難しくなっている。そんな状況の中で、これからの図書館には、コンピュータネットワークによる情報の統合、及び、より広範囲にわたる情報提供が必要なのである。

東洋大学図書館貸出冊数一覧

	館内 閲覧	館外貸出				
		一般学生	大学院	校友	卒論	その他
白山	一度に5冊まで	3冊1週間 (雑誌、視聴覚資料を含む)	5冊2ヶ月間	3冊1ヶ月間	5冊1ヶ月間	※2) 相互貸借制度有
朝霞	自由に利用	3冊2週間 (上記以外雑誌2冊1週間、 視聴覚資料1点2週間)	5冊1ヶ月間 (同左)	3冊1ヶ月間 (同左)	5冊1ヶ月間 (同左)	相互貸借制度有
工学部	自由に利用	3冊1週間 (上記以外雑誌3冊1週間、 語学資料2点1週間)	5冊2ヶ月間 (同左)	3冊1ヶ月間 (同左)	特になし	相互貸借制度有 ※3) 学外者利用制度有

※1) 3館のそれぞれ独立したサービスを受けることができます。白山と朝霞は共通の「帯出カード」を、工学部は独自の「帯出カード」を発行しています。

- 2) 外部図書館に対し貸出をします。外部図書館から借りることもできます。
- 3) 工学部では学外者に対し館外貸出をします。身分証明書が必要です。
- 4) 夏・冬・春の休暇期間中は長期貸出をします。
- 5) 貸出をしない資料もあります。
- 6) 予約がなければ継続できます。白山・朝霞は1回1週間。工学部は1週間ずつ2回まで継続できます。



## 研修報告——大学図書館職員の研修から——

### 第2回大学図書館研究集会——新しい 学術情報システムと大学図書館——に 参加して

9月15～17日、国立婦人教育会館にて、全国の国公立大学図書館の館員が集い、上記テーマで、全体集会・6分科会にわかれての研修があり、本学図書館からも3名参加しました。

学術情報システムとは、学術情報資源を共有し、相互に利用し、研究・教育の進展に有効に資するという目的のもとに進められています。図書館との関わりあいとしては、国内外の主な資料の書誌的データが得られ、全国的な総合目録が形成され、所在情報が得られ、資料の相互交流が促進されることから、図書館としても、このシステムをどのように利用し、関わっていくかが、重要な今後の課題といえます。

今回、研修の行なわれた国立婦人教育会館について紹介しますと、この会館は、婦人教育・家庭教育及び関連する分野の研修・交流・調査研究などを目的とする方はどなたでも利用できます。池袋から東上線で武蔵嵐山駅より徒歩15分の広い敷地の中に本館（図書室・音楽室・食堂など）、宿泊棟、研修棟・体育館・テニスコート・茶室などの諸施設があり、秩父連山を望む丘陵地にあります。図書室には、婦人教育に関する雑誌がかなりそろっていますので、ぜひ、興味のある方は、利用してみてください。（日野知子記）

### 著作権実務講習会に参加して

7月29～31日、文化庁著作権課主催により昭和56年度図書館等職員著作権実務講習会が開催された。全国各地の大学図書館・諸研究所等から390余名もの参加者があり、会場となった東京大学経済学部別館の一室は熱気が感じられる程でした。講習会の最終日は試験があり、また、後日レポー

ト提出という課題もあって全員懸命の聴講が続いた。

さて、著作権制度は著作権法第一条にあるように、基本的には著作者の権利の保護を図ることにある。一方、文化的所産として著作物の公正な利用にも留意する必要があることから、一定の制限（複写複製等の許容）が認められている。このような複写複製（複写サービス）を行なうことの出来る機関の一つとして大学図書館があるが、この複写サービス件数は利用形態の変化に伴ない、次第にその数を増してきている。

しかし、各館料金の不統一から特定館への依頼件数の集中化が起り、必ずしも著作権法の内容に適合していない状態にあると聞く。また、コイン式複写機での図書館資料以外の資料使用、資料の完全複製、複写による資料破損の激増等の問題を抱えている図書館が多いと言う。勿論、当館もその例外ではなく、このような実状に苦慮している。

紙幅の都合上、詳細に記載することは出来ないが、著作権法の認識不足からおこる諸問題・諸矛盾はとても多い。従って、今後図書館のみならず利用者も著作権法を正しく理解し、適切な複写複製が出来るよう改善していかなければならないと思う。

最後に、この講習会は図書館における複写複製問題を考える上で大変参考になるものでした。これからは図書館等職員に限らず、広く他の分野の方々にも受講機会を与えていただきたいものである。〈著作権法関係図書分類記号は021.2〉

（森 建一記）



## 私立大学連盟図書館部会研修(10/6~9)

今回の研修には、70名が参加した。日程は、初日が講演で、「大学に於ける図書館の在り方について」(古川早大図書館長)、および「ジャパンマークの課題」(金中国立国会図書館電子計算課課長)、2日目、3日目がグループ討議および全体討議、そして最終日に総括した。私は、逐次刊行物のグループに属した。研修についての細い内容は省くが、印象に残った点を挙げてみたい。

(1) グループ討議の中で、関西大学より説明された「図書館学術管理システム(=KULPIS)」がある。これは、雑誌業務において機械化を始めた極く稀な例であるが、オンラインで仮受入業務を始めて、およそ4年で軌道に乗ったということである。長所としては、手作業と比較すると、滞貨がなくなること、製本業務が迅速化される(製本されてから排架までの時間の短縮)、手作業でできなかったものができる。(例えば欠号調査)などが挙げられる。しかし、反面、どういふものを機械処理するかということ、を、じっくり考えることなく、従来通りの業務

をそのまま機械処理に移行したという点において、問題点が残るということである。だが、それが逆に今までの業務を洗い直し業務分析をするよいチャンスになったということは、我々によい教訓を与えてくれたということになる。

(2) ICUの製作した、16ミリフィルム「図書館の利用案内」について。これは、新入生を対象としたオリエンテーション時に上映し、大学図書館を利用するに当たっての注意事項や、利用方法を、楽しく見られるよう工夫されている。新入生教育では、教学関係、学生生活関係の説明が続くと、学生側も図書館のオリエンテーションを集中して聴かないということになりがちだが、製作費をかけただけあって(200万円)、仕上がりが良く、我々が参考にすべき、よい図画と言えよう。

今回の研修では、総務、取書、整理(和書・洋書)、奉仕、参考、逐次刊行物、自然科学系図書館の各グループに分かれ討議がなされたが、機械化について、並びに相互協力についてのテーマが各グループとも、最も関心を集めたテーマであったように思われる。

(村山英治記)



## 雑学事始

### 的屋の語源

香具師、露店商人、夜店商人などを意味し、その語源はうまくお客をだまして当れば儲かるし、それがはずれて当らねば駄目だところから、矢の的にあたるに擬して名づけられた言葉。

### デスとダの語源

こんにち一般にひろく用いられているデスと云う言葉は、明治維新までは吉原遊廓よりほかに、つかわれなかったものといわれている。それが明治三十年のころに小説家として有名だった山田美妙が小説

に用いてから次第に普及したものとわれ、ついで、やはり小説家として聞えていた二葉亭四迷がデスは語音が弱いというので「何々だ」と、つよくダという文字をもちいてから、ていねいに物を言う時はデスをつかい、男の親しい間柄などでは語尾にダという音をつかうようになったものという。

### 登龍門の語源

立身出世する緒口ということの意味し、その由来は中国の伝説によると龍門というところは黄河の上流にあってすこぶる急な流れのある地のことで、もし鯉がこれをのぼると化して龍になるといわれ、これらの人の榮達することになたとえるようになったという。

(ものしり事典・河出書房より)



## —アメリカ各種図書館見学記—

今年の8月に、夏期研修期間を利用して、アメリカのいくつかの図書館を訪問、見学してきました。訪れた図書館を西から東に列挙しますと次のようになります。カリフォルニア大のバークレー校、ロサンゼルス校、サン・ディエゴ校、ユタ州のウェストミンスター・カレッジとソルト・レーク・シティ公共図書館、ミシガン大、ワシントンD. C.のジョージ・ワシントン大とブルッキングズ研究所および米国議会図書館、ラトガース大（ニュー・ジャージー州）、コロンビア大（ニュー・ヨーク州）、イースタン・コネチカット州立大、ハーバード大です。

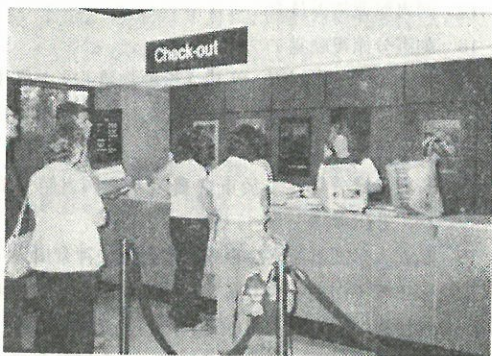
見学の重点は、電算機の利用状況と圖書の相互貸借制度に置き、駆け歩きました。

**電算機の利用状況** 電算機による目録検索は図書館の大小、性格によって、多少の相違はありますがかなりの普及を示し、ことに議会図書館では端末機がズラリと並び、職員ではなく、一般利用者が気軽に利用できるようになっており、夜にもかかわらず、沢山の人がキーをたたいておりました。コロンビア大では、目白の田中角栄さんがよく御存知のロッキード社のダイアログ・システムの利用状況を説明してもらいました。わたくしもこのシステムの講習を受けたことがあるので、そのとき考えた疑問を質してみました。ふつうに考えるよりも手間と時間がかかり、図書館員への負担は増えているようです。その概略を示しますと、第1日目に所定の申込み用紙に探して欲しいことを記入してもらい、それにもとづいて、図書館員がインタビューをし、探すべき事柄をはっきりさせます。というのは、探索を頼む本人が何を探したいかハッキリしないことがあるからです。場合によってはこれに40~60分を要するとのことです。2日目に、シソーラスに従って、探索の最適戦略をたてる。3日目に、本人に立合ってもらい実際に探索するのです。これは、図書館員がキッチンと仕事をしたことを見せることと、探索中に色々相談できるからだそうです。

結局、都合3日間を要し、人手で探すよりはも

ちろん早いでしょうが、存外に時間がかかり、利点は、網羅性に求めるべきものようです。

**圖書の相互貸借** 圖書の相互貸借は極めて盛んに実施されておりました。横浜地区の大学で最近大学院生以上を対象に実施しておりますが、アメリカの場合はこれがもっと広範囲に行なわれております。ちょうどキャッシュ・カードのようなカードを作っておきさえすれば、大学外の一般住民も自由に本を借りることができるのです。



ソルト・レーク・シティ公共図書館の貸出しカウンター

ミシガン州は財政的に苦しいのか、ミシガン大の地理学科は、予算がないとのことで学科ごと廃止になり、終身身分保証の教授たちも「他に移るように」との勧告をうけたそうです。簡単にいえばクビですね。こういう州ですから、ウェイン州立大の今年の図書予算はゼロで、1冊の本も買えないのだそうです。こうなると必然的に他の大学から本を借りるより仕方がないわけですし、またこうした制度があるから、図書予算ゼロといえることができるのかもしれませんが。

しかし、いずれにしても、図書館間の貸借は活発で、ミシガン大にはシカゴやカナダから車をとばして週末に借りにくるそうですし（土、日開館していますから）、ブルッキングズ研究所ではガツリとした体格の女性が力こぶを作って見せ、「わたしは、メッセンジャーよ。これからジョージ・ワシントン大に本を返しに行くところなの」といってリュックにいっぱい本をつめ、小雨の中を出かける場所でした。（参考係・崎村俊夫記）



館内だより ('81.6/8~9/25)

6. 8 書誌作成分科会 於本学図書館 小笠原参加  
 9 工学部分館連絡会 朝霞分館視聴覚アワー  
 10 人事異動発令 白山図書館 神林新 人事課へ  
 同遠藤弘子 朝霞総務課へ, 同妹尾みどり 厚生課より, 同金子栄子 電子計算機センターより, 整理課中桐千枝子 文学部事務課より, 同市村伊都子 経済経営事務課より  
 工学部分館 小笠原富子 朝霞教学課へ, 同杉野美津 朝霞総務課より  
 朝霞分館 藤井多喜子 白山教学課へ, 同後藤徳之 工学部総務課より  
 12 図書館運営委員会  
 16 朝霞分館視聴覚アワー  
 17 筑摩書房 吉村寿々江氏「松姫物語」ネガ借用のため来館 分類分科会 於本学図書館 日野, 直井参加  
 18 資料組織分科会 於東京農業大学 図書館 高橋, 井田参加  
 19 私立大学図書館協会東地区部会 於神奈川大学 図書館 山内(四)出席 私立大学図書館協会東地区研究部会 中村(準), 山内(裕)参加  
 20 書誌学分科会 於本学図書館 山内(四)参加  
 23 図書館連絡会 音楽資料分科会 於武蔵野女子大学 矢野参加  
 26 逐次刊行物分科会 於東京経済大学 村山, 島村参加  
 7. 3~4 仏教図書館協会総会 於京都女子大学 島田出席  
 6 書誌作成分科会 於都立中央図書館 小笠原参加  
 7 朝霞視聴覚アワー  
 14 朝霞視聴覚アワー  
 16 資料組織分科会 於東京理科大学神楽坂校舎 高橋, 井田参加  
 17 逐次刊行物分科会 於日本科学技術情報センター 村山, 島村参加  
 18 書誌学分科会 於本学図書館 山内(四)参加  
 21 分類分科会 於武蔵工大 日野, 直井参加  
 22 私立大学図書館協会東西合同役員会 於福岡大学 山内(四), 池田出席  
 23~25 私立大学図書館協会総大会 於福岡大学

- 山内(四), 池田, 矢野出席  
 8. 10 書誌作成分科会 於聖心女子大学 小笠原参加  
 19 事務処理システム研究講習会 於私学会館 栗沢参加  
 25~29 日本私立大学連盟主催中間管理職研修 於草津, 山内(四)参加  
 27~29 逐次刊行物分科会合宿 於大学生協小諸山荘 村山参加  
 9. 5~7 書誌作成分科会 於女子美術大学軽井沢寮 小笠原参加  
 12 図書館職場研修 於工学部分館 白山, 工学部分館, 朝霞分館合同参加  
 16~17 日本図書館協会大学図書館部会主催 第2回大学図書館研究集会 「新しい学術情報システムと大学図書館」 於国立婦人教育会館 丸山, 日野参加  
 14. 16~17 コンピュータ研修会 於工学部 電算室 原口参加  
 22 分類分科会 於国際基督教大学 日野, 直井参加  
 24 法政大学図書館見学 池田出席  
 資料組織分科会 於本学浦水会館 高橋, 井田参加  
 25 明治大学図書館見学 池田, 大和田出席  
 立教大学図書館見学 山内(四), 嶋田出席  
 理工学分科会 於上智大学 伊藤(美)参加  
 逐次刊行物分科会 於法政大学図書館 村山, 島村参加

一 編集後記

- ★ 前号 (No.54) より, 編集委員が新しくなりました。構成メンバーは  
 白山 より 池田 勉, 水口 靖, 黒沢 透  
 直井明子  
 朝霞分館より 河田 茂  
 川越分館より 原口法子  
 ★ 今回は, 大学図書館と機械化を身近な問題としてとらえ, 「情報処理と大学図書館」というテーマのもとに専門の諸先生方から原稿をお寄せいただきました。ご意見ご感想がありましたらお寄せ下さい。  
 ★ 読書の秋も深まりつつ, 編集委員一同は, 「コスモス」を読む立場から「編集」という立場にたたされ, この仕事の苦勞を痛感しています。  
 ★ 食欲の秋でやや太めになったからだはこの冬のウィンタースポーツで引き締めましょう。